



書店ゼロの自治体が 2割超という現実

近くに書店がないということとは

かつて函館にあった出版社の社長の未亡人に、偶然お目にかかったとがあります。その出版社は、私のやっている出版と比べるのは失礼なくらい、多彩なジャンルで、立派な本を、たくさん出されていました。

思わず「よくあれだけでも、よいご本をお出しになられたものですね」と申し上げたところ、「いえいえ、昔は函館にも本屋さんがたくさんありましたが、今は売るところがなく、たいへんでしよう」と、逆にねぎらいの言葉をいただきました。

うちの場合、書店だけでなく、まちセンのドリップ・ドロップさんはじめ、市内の喫茶店やホテル、土産物店にも置いてもらっています。ですから単純に、本が売れないのを書店が少ないせいにすることはできませんが、身近に書店がない、というところは、「フ

ラツと立ち読みをして、気に入った本があれば購入する」という機会をなくしているということだと思つくと、淋しさを感じます。

書店ゼロ自治体、北海道は全国一位

私が育つたのは大阪近郊で、各駅停車しか停まらない小さな駅が最寄り駅でしたが、駅前には書店が2軒あり、学校帰りや、電車で出かける前後など、当然のように立ち読みを楽しんだものです。

現在は出版をやっているわけですが、新しい本を出し、それが地元紙に紹介されますと、当日や翌日には決まつて「どこに行けば買えますか」という問い合わせの電話がかかってきます。きつと、気軽に出かけられる範囲に書店がない、という人が少なくないからでしょう。出版社にしてみれば、記事になったり、自ら宣伝したりしない限り、いくら出版しようが、なかなか知ってもらえないということでもあります。

妙なたとえですが、若い男女が少なくなつた。だから婚活でもしなないと知り合う機会が得られない、という地方の事情とも似ています。

大手取次(本の卸売会社)である、トーハンが去年発表した数字では、

全国に約1900ある自治体のうち、書店が1軒もない自治体は420(香川県を除く)。都道府県別では北海道が全国トップで、道内179自治体のうち書店ゼロが47。今や書店のない自治体の数は、全国的にも2割以上ということになります。

この状況で、紙本が電子書籍か

函館の本をつくりたいが資金がない。そんな事情で最初は電子書籍だけの出版を考えていました。しかし当初は、誰も電子書籍の買い方を知らない、読み方も知らない、それどころか電子書籍そのものを知らない、という状況でしたので、仕方なく紙の本の出版も始めました。販売は函館市内とインターネット。頑張ればある程度は売れる、造本を簡素にす



電子書籍のみ発行の新刊。猫のタマと佐藤国男さんの共著『遮光器士偶は宇宙人ではニャーニャーニャかった』(右)と、日本語の乱れに疑問を投げかける『そろそろ使うのをやめたい現代語辞典』

れば利益率も確保できる、ということとで6年間やってきました。

しかし限られた売場で「売る」とことを考えますと、本の企画そのものが制約を受けますし、「売れるはず」という出版社の思惑通りに売れるほど世の中は甘くありません。しかも紙の本を取り巻く環境は悪化の一途。一方で函館以外の本もつくりたいと思うようになってきました。

そんなわけで昨年末から年初にかけて、「電子書籍だけ。売れることを考えず、つくりたい本を」ということで2点の新刊を制作しました。

うち1点は、縄文研究者でもある木版画家の佐藤国男さんによる縄文の入門書です。「縄文で世界遺産をめざすなら、地元も市民ももっと縄文について知りましょう」という思いもありますし、国境を越えられる電子書籍として、いずれその英語版を発刊するため、現在、その翻訳を進めています。

★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

1959年生まれ、大阪出身。
2011年秋より函館に移住し、「新函館ライブラリ」を設立。
通り一遍の観光客ではなく、コアな函館ファンに訴えるような函館本の出版に取り組むほか、函館のブランド力に頼らない出版企画も模索中。